



今江祥智 の本

第8巻

優しさごっこ

理論社

智祥江今
の本
第8巻

こっこさし優

社論理

今江祥智の本第8巻

一九八〇年十月初版

一九八八年五月第六刷

著者 今江祥智◎

発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話 営業〇三(二〇三) 五七九一

出版〇三(二〇三) 五七九四

編集〇三(二〇三) 二五七七

振替 東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます

冬子に

《世間には、両親が別れたために不幸な子どもが
たくさんいる。しかし、両親が別れないために
不幸な子どもも、同じだけいるのだ。》

—— エーリヒ・ケストナー

第1章	夏の日ざしがあんまりまぶしいので、あかりは清おじさんのサングラスを借りて、かけてみた……………	7
第2章	とうさんが「講演」しているあいだ、あかりはその部屋のいちばんうしろの席に坐って……………	17
第3章	夏休みだったことが、ほんとに幸いだった……………	27
第4章	とうさんのモウクンレンと、あかりのガマンにもかかわらず、自分の家事のやり方の一切が……………	38
第5章	とうさんは、一覧表といっしょに自分の結婚後十三年間の思い出も……………	48
第6章	おれはおれなりに一生懸命やってきたし、その学校が好きだから、かわりには……………	58
第7章	にしんぞうめん、小なすの茶せん揚げ、アユのおどり焼きにスズキのあらい、じゅん菜の冷やし汁と……………	69
第8章	宇多野さんの電話を切ってから、とうさんはふっと考えた……………	79
第9章	お腕があるのにふたがない、トンカチは見つかったが、ねじまわしはどこかへ消えた……………	89
第10章	去年のセエタアを着せると、あかりはかかしに古着を着せたようになつこうになった……………	99
第11章	藤田さんは、早速にとうさんの願いを叶えてくれた……………	109
第12章	おれにとってもこれまでに、ちゃんと何人かの「相棒」がいたなあ……………と、とうさんはがらになく……………	120
第13章	電車の音がとうさんの声を消してしまったのか、あかりは答えなかった……………	130
第14章	「私はこのあいだ、父といっしょに、高知へいってきました……………	141
第15章	冬休みにはいったあかりの相手は、結局とうさんしかいなかった……………	152
第16章	正月の訪客に疲れてしまった感じで、とうさんは、一人になりたくて植物園へでかけた……………	162

第17章	正月早々で、しかも今おたくがシンドイのン分かってるけど、泊めてもらえん？と、達也は言った……	172
第18章	あかりは、一週間、とうさんなしで暮した……	182
第19章	とうさんのひげは、とうさん自身が思っていたよりも、はるかに濃かった……	194
第20章	六甲から帰ってから、とうさんはときどきひとりごとをいうようになった……	204
第21章	春休みは、とうさんの方があかりよりひと足早かった……	214
第22章	ふたりの若い食欲にそのかされて、とうさんもきれいに平らげていった……	225
第23章	七人の侍ならぬ大人五人子ども二人の一同は、無事に犬山のモンキー・センターに到着した……	237
第24章	島田さんがもってきた絵本の原稿は、とうさんを正直うならせた……	247
第25章	あかりは敏感に察していた……	257
第26章	それから何日も、とうさんはあかりとのやりとりを、頭のすみっこに思いうかべていた……	268
第27章	ーほんまやろか、そんなン……	279
第28章	……とうさんは見知らぬ街の通りを駈けていた……	290
第29章	とうさんの絵葉書にたいして、山名さんは返事をくれなかった……	301
第30章	あかりはとうさんの決心がうれしかった……	311
あとがき	ー優しさっこの後にくるもの……	322

編集委員 上野 瞭

長新太

灰谷健次郎

装 幀 平野甲賀

装 画 長新太

制 作 小宮山量平

発 行 山村光司

編集担当 日比野茂樹

本 文 加藤文明社

表 紙 ダイニツク

カバ ー トラヤ印刷

製 本 誠製本

用 紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本 第8巻

優しきこころ

第1章

1

夏の日ざしがあんまりまぶしいので、あかりは清おじさんのサングラスを借りて、かけてみた。明るすぎて、白っぽく散りぢりに見えていたプラットホームからの街の風景が、水族館の水槽の中のように、ほの暗くサングラスの中におちついた。

街が急に夕ぐれの光につつまれたみたいで、ほんとに時間も過ぎてしまったみたいで、あかりはうつかり、きょう一日中、ここでこうして、とうさんとかあさんの帰りを待っていたような気もちになった……。

そう思えたのもむりはない。かあさんがでかけてからもう十日、とうさんがでかけてからでも四日間過ぎていたのだ。

かあさんは、ここ（宇治の町）が暑すぎるから黒姫の友だちの山荘へでかけるといっていたし、とうさんは、そこでかあさんがたおれたからだといってでかけた。小学校三年生のあかりには、黒姫まで四時間もかけてでかけるよりも、家でのんびり遊んでいたほうがよかったし、だいいち、たまに、かあさんの——なさい、——して

はいけません……という、命令と禁止ことばヌキで日をすごしたかった。それで、とうさんとるすばん役を買ってでたのだったが、とうさんまででかけるとは思わなかった。ひとりぼっちになったあかりのために、ピンチヒッターとして、清おじさんの夫婦がやってきてくれた。清おじさんは、かあさんの弟だ。京都大学に受かったのに、合格できると分かればいいんだ——と、あっさり大学行きはよして、おやじさんの仕事のあとつぎに打込んだ。おかげでいまは、神戸の山の手で、小綺麗な洋服屋さんの店をもって暮している。子どもがいないから、こんなときはいつも気さくにやってきてくれて、あかりもなついていた。

*

とうさんがでかけたあとの四日間、おじさん夫婦は、あかりを相手に、ほんとによく遊んでくれた。近くのホテルのプールで一日泳いだ。京都まででかけて、繁華街の遊戯場ゲイセンダで半日遊んだ。六本立てのお子さま映画大会にもつきあつて、夫婦ともアイスクリンをなめてくれた……。

あかりのとうさんは画家で、よくスケッチ旅行にでかけたり、展覧会の前は画室にとじこもったり、おまけにこのごろは、子どもの絵本を描くことがおもしろくなって熱中したり……で、あかりと遊んでくれる時間があまりなかった。

もっとも、ひまがあれば、あかりを近所の川へつれていって、半日くらい、自分のほうが熱心にオタマジャクシすくいをすることはあつた。とってきたオタマジャクシを庭のすみっこに池に放したら、それがみんなちゃんと育ったから、かあさんが悲鳴をあげた。きらいなカエルが池から庭にあふれるくらい動きまわり、鳴きたてたからだ。二人のオタマジャクシすくいは以後、禁止された……。

あかりが一年生になった春、お祝いに、油絵のりっぱなセットを買いこんできて（十号のキャンバスと、それに合わせた額ぶちまで揃っていた）、かあさんをあきれさせた。クレヨンもまだろくにあつかえないのに、油絵

道具一式だなんて、そんなものより、いまあかりが喜ぶようなものが思いつけなかったの……と、とうさんは叱られた。あかりは、とうさんのおんちゃんかなプレゼントがうれしかったのだった、そんなふたりを見て、黙ってしまった。油絵セットは、いまでも、あかりの部屋の押入の奥に、きちんとしまわれていた……。

*

そして五日目の朝、きのうのとうさんからの連絡で、ふたりの帰宅を知らされて、あかりは清おじさんと駅にきていた——というわけだった。名古屋から新幹線で京都につくからというので、暑いところをがんばって、京都駅まででむかえることにした。（いつもなら、近くの近鉄の大久保駅までしかいかない）

あかりは、ずりおちそうになる大きなサングラスを指でおしあげた。そこへ、目の前の街の風景を横切って列車がすべりこんできた。サングラス越しに見るひかり号は、水族館の大水槽に泳ぐフカミだった。

停止。扉が開く。人の少ない京都駅ではプラットホームのはしまで見通せる。あかりは、背のびしてふたりの姿をさがした。まばらにおりてくる乗客の中で、のっぼのとうさんのボロシャツ姿が、まず見つかった。あかりが手をあげ、とうさんがこたえた。かけていきながら、あかりはかあさんの姿をさがしたが、見つからないうちに、横の列車の扉がしまった。はっと立止ったあかりの気もちを先取りしたようにとうさんが言った。

—おりたのはとうさんだけや。かあさんはこのまま大阪までのっていく言うとするさかい。

—大阪って、どこへ？

—螢ヶ池のサトや。

—なんで？

—疲れとるさかい、もうちょっと休みたいんやと。

列車が動きはじめた。あかりは窓をのぞきこむようにして、かあさんの顔をさがしたが、見つからない。あぶないよォ……と、清おじさんが、あかりをかかえあげて白線の内側までつれもどした。目の前の列車が白と青の太い線になり、見るみるうちにホームから消えていった。

そしてかあさんも、それきり消えてしまった……。

あかりは、目の前に立っているのが、とうさんとおじさんというよりも、見知らぬふたりの大人みたいな気がして、一歩さがって身がまえるようになかった。（自分でもどうしてそうしたのか分からなかった）ふたりの大人は、こごえで早口に何かしゃべりあったが、あかりにはそれが、水槽の中の魚のおしゃべりに似て何もきこえず何も分からなかった。列車の走りさったあとにはレールが二本、にぶい白い線になってのびているばかり、ブラットホームは三人だけのこして、からっぽになった。

それからおじさんの手がのびてきて、あかりのサングラスをはずした。夏の光がいきなり目の前で白い爆発をおこしたみたいに明るくて、あかりは目をしばたいた。小さな涙が一つ、ぼろんとこぼれたが、あかりはそれを明るさのせいにした。待っていたかあさんにあえなかったせいでもあるのは、自分でも知っているくせに、どうしてか分からぬまま、そう思いたくはなかった。

とうさんがあかりの手をとって歩きました。いつに似ず、強いにぎり方だったのが、あかりの気になった。いつもは、あかりから、もっとしっかりとにぎって……とたのんでも、まあまあ……と、おもしろはんぶんみたいにたよりないにぎりかたで、あかりをぶんぶんさせたものだったのに……。

構内の赤電話から、清おじさんは、奥さんに話した。奥さんは暑いので、あかりの家で待っていた。きょうはしばらくぶりに二組の夫婦とあかりの五人で、京の街へ夕食にでかける約束だった。それなのに、まずかあさん

がおりてこないで消え、電話のあと、おじさんも、それじゃ、と手をふって消えてしまった。おばさんは？ときくと、とうさんはあいまいに首を横にふった。どうやらこれも消えてしまわらしかった。愉しみにしていたことを、つぎつぎにはぐらかされた気もちで、あかりはごきげんなめになった。こうなったら、少しでも早く家に帰りたい。大きなニレの木蔭のゆりいすに寝かせてきたモンローに会いたくなかった。モンローは洗った熊のぬいぐるみだから、まさか、いすをおりてうろつきまわったり、迷子になったりしないだろうが、夕立でもきたらずぶぬれになる。

あかりは近鉄線のホームへいそごうとした。それなのに、とうさんは、あかりの手をぐいとひっぱって出口の階段へつれていこうとするのだ。とうさんは、あかりの顔をすまなそうにながめ、小さな声でいった。

「家に帰っても、だあれもおらへん。そやから、明日、八瀬^{やせ}のほうである講演の係りの人^ンとこで泊めてもらうことにしたンや。

そんなの聞いていない。何も聞いていないことだらけだ——と、あかりはますますふきげんな顔になった。

その係りの人は、改札口で待っていてくれた。丸顔でやさしい目をしていて、とうさんに負けないくらいのっぽだから、まるで、子どものまま育った大人に見えた。

藤田です、と名のつたその人は、とうさんにふかぶかとおじぎをしてから、おじょうちゃん、八瀬は空気も水もきれいやさかい、きょうは、川遊びにいきましょな……と、のんびりした調子で話しかけた。それが、こわばっていたあかりの気もちをとるときはぐし、あかりはまだ不満足のものの、心のどこかに、ピクニックにでかけるときはずみが生まれていた。

藤田さんの運転する車は、冷房もよくきいていて、それがまた、プラットホームにいたときから熱くなっていたあかりの頭を冷やし、おちつかせた。

車は気もちのいい速さで、京の街をまっすぐに北へ走りつづけた。山が近づき、山道に入ると、目が緑で洗われるようで、思わず、目をばちばちさせた。プールで泳いだあと、きれいな水で目を洗うときの気もちよさがひろがって、あかりはいつのまにか眠っていた……。

2

目がさめたのはもう夕方近かった。あかりは広い涼しい部屋で寝かされていた。ほんの少しのあいだ、あかりは自分がどこにいるのか分らなかった。次の部屋からのとうさんの声と、それに受け答えしている相手ののんびりした調子が、あかりに、さっきまでのことを思いださせた。

（あれは、たしかに藤田さんとかいうてた人の声やわ……）

それからその藤田さんが、川遊びにいきましょね……と約束してくれたことを思いだした。あかりは、はね起きて次の部屋へ入っていった。

そやから、しばらくはひとりで……と言いかけていたとうさんが、ふりかえって、や、あかり、おはよう……と、とぼけた挨拶をしてくれた。藤田さんも、おはようさん……と言ってから、さ、はよ、川へいきましょ、魚が待ちくたびれてはる……と立ちあがった。

ふたりの大人にそろっておはようと言われたので、あかりはもう少しで、ほんとうに朝かしらん……と眠ってしまうところだった。けれど、外へでたとたん、日の明るさが朝のものでないのに、気がついた。午後のいちばん暑い時間を眠ったから、体がしゃんとしていた。あかりは藤田さんから手渡された魚すくいのある柄をしっかりにぎって小走りにあとを追った。とうさんも、いつのまにか田舎風な麦わら帽子をかぶって、ついてきた。

*

川魚は逃げ足が早くて、結局あかりは小さなのを一びきすくえたきりだったが、冷たくきれいな川に入って遊べただけで、満足していた。藤田さんも、そのところはちゃんと知っていて、すくった数にはふれなかった。そして、家にもどってから、生けすに入れてあるアユを、あかりにすくいとらせてくれた。あみから手づかみにアユをとりだしているうちに、よく知っているにおいが手についたのに気づいて、かいでみた。アユをつかんだはずなのに、手には魚のにおいはなく、スイカのにおいがした。首をかしげるあかりに、藤田さんは、

—ええにおいがしますやろ。スイカとおんなじや。なまぐそうないところが、アユやなあ……。

と説明した。そして、水ごけしかたべないから、そうなのかもしれないし、そんなアユばかりたべると、おなかのなかまできれえになって、きれえな女おんなはんになりますやろなあ……と、笑いながら言った。きれえな女はん——ということばが、あかりの耳もとで小さなシャボン玉みたいにはじけ、夕食にでたアユを、あかりは一生懸命にたべた。とうさんに手伝ってもらわずに、こまめに身をとってたべた。にがいのをがまんして、おなかのところ（そこにこそ、「きれえな女はん」になれるも、とがある水ごけがつまっている……）も、ていねいにたべた。——

*

……あかりは花嫁さんになって、とうさんに挨拶していた。重い日本髪を結むすった頭を、たたみにすりつけるようにおじぎして、そんなときのおきまり文句、

—おとうさん、ながながとおせわになりました……。を

を言っているのだった。

とうさんは仏壇を背にして（どうしてだか、これもたいていそんなことになっている）、紋つき姿でかしこまっ

ていた。のっぽの体だけにきゅうくつらしく、二重に顔をこわばらせて、あかりの挨拶を受けていた。

結婚式なのに、お祝いに集まっているはずの親戚の人がだれもないで、とうさんと二人きりなのが妙にさびしかった。

—元気でがんばるんやで。

と、とうさんが言った。

—しっかりアユをたべるんやで、ほなら、きれいな女めなこはんになれる……。

おとうさん、なに言うてはんの……—おかしくなって、あかりは目をあげた。とうさんはあいかわらずきまじめな顔でくり返した。

—しっかりアユをたべるんやで。ほなら、きれいな女はんになれる……。

あかりは思わず、ふきだし、

—おとうさんたら、てんごばかり言うて……。

花嫁姿であることも忘れて体をまげて笑いころげた。そして、自分の笑い声の大きさにおどろいて——あかりは目をさました。

あみ戸ごしに夜明け前の空の明りがうつすらと見える。もう四時ごろだろうか。

(わたし、藤田さんとかで泊めてもらってるんやったわ……)

あかりは暗がりの中で目をさまし、隣のふとんで大の字になっているとうさんに目をやった。とうさんは、いつか見た大文字山の送り火の「大」の字みたいに左足を長いめにのばして、寝ていた。黒姫からこっち、よく眠っていないのかもしれない——と思った。静かにしといて、ぐっすりやすませてあげねば……と、おかあさんみ